

平和教育と心理学—アウシュヴィッツ強制収容所を訪れて—*1

友田 貴子

人間社会学部心理学科

概要

アウシュヴィッツ強制収容所が解放されて今年で 75 年が経つ。その悲惨な経験から私たちはいったい何が学べるのだろうか。アウシュヴィッツ強制収容所への筆者の訪問記と合わせ、心理学が平和や平和教育にどのように関わられるのかということについて考察する。

1. はじめに

「歴史から学んだと言えればよかった」—これはアウシュヴィッツ強制収容所が解放されて 2020 年 1 月 27 日で 75 年を迎え、収容所跡での追悼式典に先立ち、同 1 月 23 日にエルサレムのホロコースト記念館でドイツのシュタインマイヤー大統領が述べたものである。「加害者はドイツ人だった。私は歴史的な罪の重荷を背負ってここに立っている。ドイツ人は歴史から学んだと言えればよかったが、憎悪や非難が広がる中、そうは言えない」と述べた（毎日新聞,2020 年 1 月 28 日）。収容所解放後 75 年になり、生存者の数もどんどん少なくなっている。そう遠くない将来、生存者の話を直接聞くことができる機会は永遠になくなってしまう。

このような状況の中、アウシュヴィッツを自分の目で見ることで平和について何らかの気づきを得ることができるかもしれないという動機から、アウシュヴィッツ強制収容所跡を訪れることにした。本論ではアウシュヴィッツ強制収容所訪問記とともに、心理学が平和や平和教育にどのように関与する*2ことができるかという点について考察する。

2. アウシュヴィッツ強制収容所訪問記

2019 年 8 月 22 日、私はポーランド南部、オシフィエンチム市にあるアウシュヴィッツ強制収容所（跡）にいた（以下（跡）は省略）。当初計画していた旅行は、ベルリンの壁崩壊*3から 30 周年のベルリンを訪ねるというものであったが、計画中に知人からアウシュヴィッツに行くことを勧められた。そのときはアウシュヴィッツへの行き方も知らなかったし、歴史上大きな意味をもつ場所であることは認識していたが、自分が行ける場所にあるとは思っていなかった。つまり、心理的にとても遠い場所であった。しかし調べてみると、ポーランドの南部にある、クラクフ*4から、バスや電車で 1 時間半程度のところにあることがわかった。

*1 本稿は、埼玉工業大学臨床心理センターで 2020 年度に開催される「土曜セミナー」で発表するものと同じのテーマである。構成は一部変更する予定である。

*2 「貢献」としたいところであるが、控えめに「関与」とした。

*3 1989 年 11 月 9 日。

*4 首都ワルシャワ(Warszawa)が日本でいう東京なら、クラクフ(Kraków)は古都であり、京都にあたる。第二次世界大戦はドイツ軍がポーランドに侵攻したことで始まるが、その後終戦までにポーランドの各都市は空爆により壊滅的な被害を受けた。クラクフはその難を免れた数少ない都市である。

当日、首都ワルシャワ*⁵を經由し、LOT ポーランド航空*⁶でヨハネパウロ2世・クラクフ・バリツェ空港*⁷に到着した。エアポートバスでクラクフ中央駅(Kraków Główny)のバスターミナルに到着後、駅前のホテルにチェックイン。渡波の前にいくつか観た映画の中に『シンドラーのリスト(Schindler's List)』*⁸があるが、主人公のオスカー・シンドラー(Osker Schindler)の経営していたホーロー工場跡が歴史博物館になっているので見学に向かった。私は予約をしていたが、予約のない人は入場を断られていた*⁹。博物館は第二次世界大戦前、戦中のポーランドやクラクフについての展示が多く、忘れてしまいたいだろう当時の記録の公開を侵攻された側が行っているということに大きな意味を感じた*¹⁰。シンドラーについては、工場で作っていた鍋の展示やシンドラーが工場の従業員のユダヤ民*¹¹を絶滅収容所に送らないようにするためのリスト(名簿)を作成したであろう机やタイプライターの再現の展示がいくつかある程度であったが(図1)、映画にも出てきた入り口の階段を見つけたときには鳥肌が立つ思いであった。クラクフのゲッター(ユダヤ民居住区)であったカジミエシュ地区*¹²に、映画の中でユダヤ民の子どもが身を隠した階段を見つけたときにも同様の感情が湧きおこった。



図1. シンドラーの執務机

杉原千畝*¹³は純粋に難民を救いたい一心であったろう。それに対し、シンドラーの当初の目的は、ユダヤ民を雇い、安い賃金で労働力を確保しようという商売根性からくるものであった。しかし工場で働くユダヤ民たちと触れ合ううちに、彼らを心から救いたいという気持ちの変化が起こり、私財を投げ売り*¹⁴、一人でも多くのユダヤ民を助けようとした。シンドラーに助けられたユダヤ民は1200人ともいわれ、しかし彼はもっと多くの人を助けられればよかったと後悔もした。このように、ナチスの党员であったシンドラーを、そして金儲け主義であったシンドラーを、ユダヤ民を助けることに向けさせたものは一体何だったのだろうか。

シンドラーの工場見学の翌日はアウシュヴィッツ強制収容所に向かう計画を立てていたが、クラクフから現地までの行き方を事前に調べることができなかった。インターネット

*⁵ ワルシャワの空港はワルシャワ・ショパン空港という美しい名前の新しくきれいな空港である。

*⁶ LOT ポーランド航空は、2016年1月14日からワルシャワ～東京/成田就航。LOTとは「航空」の意味である。

*⁷ ローマ法王故ヨハネ・パウロ2世はクラクフ近郊の出身。

*⁸ 『シンドラーのリスト』はスティーヴン・スピルバーグ監督による1993年のアメリカ映画。第66回アカデミー賞では最優秀作品賞・監督賞ほか、7部門を受賞した。

*⁹ 1日に入場できる人数に制限を設けているらしい。

*¹⁰ 逆に、ドイツはナチスによる犯罪行為に向き合いたくないために展示などをしないという説もあるようだが、首都ベルリンには2005年、「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑(ホロコースト記念碑)」がブランデンブルク門にほど近い、ベルリンの一等地の広大な土地を利用して作られたし、インパクトのあるユダヤ博物館の開設やユダヤ民を収容所に送り出した17番線ホームにその足跡が埋め込まれており、積極的に歴史を忘れないようにする努力もされていると感じる。

*¹¹ 「ユダヤ人という人種はない」ということから「ユダヤ人」ではなく「ユダヤ民」と表記するという中谷(2005)に倣う。

*¹² カジミエシュ地区には現在もシナゴークやユダヤ料理店が集まっている。

*¹³ 杉原千畝は第二次世界大戦中、リトアニアのカウナス領事館で、ヨーロッパ各地、とくにポーランドから逃れてきたユダヤ民に通過ビザを発給した日本の外交官。「日本のシンドラー」と呼ばれることがある。

*¹⁴ ユダヤ民を「絶滅収容所」に送らないようにするために、ひとりいくらかというふうなお金(賄賂)を支払う必要があった。

で検索してもあまり情報は得られず、ホテルでは情報がないと言われた。クラクフからのバスや専用車での送迎つきのツアーもあったが、見学時間が短かいため申し込まなかった。その代わりに、アウシュヴィッツ主催の6時間の英語のスタディツアー*15を予約していた。スタディツアーに予約した以上は、アウシュヴィッツまでは自力でいかななくてはならない。朝、早めにバス停に行き、6時台の始発のバスに乗り込んだ。発車の時点ですでに満席であった。このバスはアウシュヴィッツが終点ではない普通の路線バスであり、途中の停留所で乗り降りがある。発車時には立ち席がでるほど混んでいた。



図2. アウシュヴィッツ
「働けば自由になる」

スタディツアーは9時からだった。30分前には着いているようにとのことだったので、始発のバスに乗ったのは正解だった。現地に到着すると、予約をしていない人の列が200メートルほどできていた*16。入場前の案内所の建物には、トイレはもちろん、書籍やポストカードなどの売店、軽食の売店、両替所などがあった。

スタディツアーの集合場所に行くと、20人くらいの人が集まっていた。ツアーガイドの男性(K氏：英語を母国語とする方だろう)の声を拾うことができる受信機を渡され、有名な「働けば自由になる(ARBEIT MACHT FREI*17)」の門をくぐる(図2)。

アウシュヴィッツ強制収容所はオシフィエンチム市にあるが、アウシュヴィッツというのはオシフィエンチムのドイツ名である。収容所には第一収容所(アウシュヴィッツ/オシフィエンチム)、第二収容所(ビルケナウ/ブジェジンカ)、第三収容所(モノヴィッツ/モノヴェツェ)*18があるが、それ以外にも小規模なものが近隣に点在していた。博物館として公開しているのは、アウシュヴィッツとビルケナウのみである。この2つの収容所跡は30分から1時間ごとに出るシャトルバスで行き来することができる。

8月なのに肌寒かったが、良い天気、木々の緑がまぶしいほどであった。アウシュヴィッツの建物はほとんどが現存しており、400m×500m(20ヘクタール)ほどの敷地に50棟くらいのレンガの建物がある。ひとつひとつの建物の大きさは15m×40mくらいで、さほど大きくはない。ほとんどが2階建ての建物*19であった。130万人もの人が移送され、生存者はその10%にも満たないだろうという殺戮の地で不謹慎かもしれないが、アウシュヴィッツは大学のキャンパスと見紛うほど美しく、そこにすぐに死のにおいを感じることはできなかった。もっともそう装うことで、中で行われていたホロコースト(大虐殺)の事実、収容者の卑劣な扱いから目をそらさせる意図がナチスにはあったようである。

*15 ひとり100ズウォティ(złoty)(日本円で3,000円ほど)。ポーランドの物価を考えるとかなり高い。アウシュヴィッツ強制収容所の入場料自体は無料である。日本人で唯一アウシュヴィッツの公式ガイドの資格をもつ中谷剛さんに連絡を取り、いくつかの日程を提示してガイドを依頼したものの、すでにグループツアーのガイドを引き受けてしまったとの理由で断りの返事を受けていた。再びアウシュヴィッツを訪ねることがあれば、そのときは是非中谷さんにガイドをお願いしたいものである。

*16 朝8時から10時までは予約なしでも入場できる。

*17 3つ目のBは上下逆さまである。収容所の建物などの設備は収容者が建設の作業をするが、収容者が看板を作成した際に、抵抗の心理からBの文字を逆さまにしたらしい。

*18 第三収容所は戦時工場群であり、収容者をタダで働かせていた。

*19 収容者が増えたため、1941年から1942年の間に、すべての平屋に2階部分と屋根裏が増築されたという。

建物の中は、多くの場所は収容者を収容する場、つまり彼らの「住まい」*20であった。『夜と霧』の中でフランク*21も述べているが、狭い3段ベッドに身動きが取れないほどぎっしり詰めあって寝ていた。もちろん冷暖房装置もなく、とくに凍てつくような寒さ*22の冬場のつらさは想像に難くない。トイレは別棟にあり、板にずらっと穴を開けたものが置かれていて、個室ではなく、他者の前で用を足さなくてはならない。収容棟の中には、収容者の遺品が展示されているものがある。収容者は収容所に着くと、カバンなどの荷物はすべて没収され、シャワーを浴び、縦縞模様の服が与えられるのでそれに着替える。体にはID番号の焼き印を入れられる*23。貴金属（アクセサリや結婚指輪）も没収される。髪の毛もざっくり切られた。カバンや靴、金歯や入れ歯、髪の毛などの実物が、今も建物内に展示されている*24。



図3. ビルケナウの引き込み線

美しいとさえいえる建物とは対照的に、75年前にはそこに「人間」がいたこと、そして展示されているものは彼らからはぎとられたものであること（名誉とともに。しかし人間の尊厳まで奪うことはできただろうか*25）、それはそのごく一部に過ぎないことをまじまじと感じる。とくに衝撃的だったのは、10号館*26と11号館の間の「処刑の庭」と呼ばれる場所で、そこでは収容者（ポーランド人の抵抗組織のリーダーなど）が壁に立たされ銃殺された。ガス室やクレマトリウム（火葬場）は残存しているものもあるが、ナチスが連合軍に発見されるのを恐れ、自ら爆破したものもある。ビルケナウには爆破したままの状態で見られるクレマトリウムがある。ガス室での殺戮に使われた薬剤であるチクロンBの缶の展示もある。どれも現実であるのに、現実感が失われるような感覚に襲われる。

午前中はアウシュヴィッツを見て回ったが、そろそろビルケナウに移動の時間だとガイドのK氏が言う。1時間くらいの昼休みがあるのかと思っていたら、15分後のシャトルバスに乗るから、それまでにトイレや昼食を済ませてほしいとのこと。聞き間違いかと思い、メモ帳とペンを出して文字にして確認するが、間違いなしとのこと。急いでパンで昼食を済ませ、ギリギリでシャトルバスに乗り込む。スタディツアーの他の人たちもバスに間に合ったようで、現地で再集合する。点呼などはまったくない*27が、不思議と全員揃っているところに、6時間のスタディツアーに申し込むだけの意識の高さを感じる。

バスで10分ほどでビルケナウに着く。アウシュヴィッツを紹介する写真としてよく目にするのが引き込み線*28がレンガの建物の下を通るもの（Death Gateと呼ばれる）である

*20 今は生存者を除く収容者の「お墓」である。

*21 ヴィクトール・E・フランク（Viktor E. Frankl, 1905年3月26日-1997年9月2日）は、ウィーン出身の精神科医であり心理学者。自らの強制収容所での体験を綴った『夜と霧』は、世界各国で読み継がれている。

*22 寒い日は氷点下20度にもなったという。

*23 例えばフランクの番号は119104番で、親衛隊や特命労働隊員（カポー）などからは名前ではなく番号で呼ばれた。

*24 遺体から金歯を引っっこ抜いたり、髪の毛を奪うことも日常的に行われていた。

*25 極限状態にある人間の心理についてはフランクの『夜と霧』につぶさに書かれている。

*26 生体実験が行われていた。

*27 強制収容所では点呼が厳しく行われ、遅刻やサボタージュは許されなかった。

が、これはアウシュヴィッツではなくビルケナウである（図3）。ビルケナウはアウシュヴィッツと違い、敷地が広いのか、98棟残っているというバラックもまばらにあるようにしか見えない。広い敷地には前述のように破壊されたクレマトリウムの跡や、ガス室に送られるユダヤ人の女性たちが全裸にされた空き地（第5クレマトリウムの近く。隠し撮りした写真から判明）が残っている。広さはアウシュヴィッツよりはだいぶ広く、1.2km×1.2kmくらい（140ヘクタール）である。しかし実際にはもっと広く感じられた。ビルケナウはアウシュヴィッツと比べると広く閑散とした感じがし、アウシュヴィッツがややもすると大学のキャンパスのように思われるのに対し、ビルケナウはホロコーストの地であることがひしひしと伝わり、死の気配も漂う。アウシュヴィッツをはじめ他の強制収容所での生活の詳細は、たとえば『夜と霧』にも詳しく書かれているし（とくに収容者の心理状態について）、映画『ショア』（Shoah）^{*29}や『ソビブル、1943年10月14日午後4時』^{*30}で生存者の証言を見ることができる。

6時間のスタディツアーは長かった。とくにビルケナウは広く、歩きっぱなしのために歩くのがしんどくなった。スタディツアーを終え、アウシュヴィッツにシャトルバスで戻り、クラクフ行きのバスに乗り込み、私は無事アウシュヴィッツから帰還した^{*31}。

3. 平和教育と心理学

私が担当する授業は社会臨床心理学や健康心理学に関するものであるが、アンネ・フランクが日記を書いていたことが講義のテーマである自己開示の一形態にあたるとして、講義の中で半ば強引にアンネ・フランク（アンネの日記）やアウシュヴィッツの話をするようにしている。昨今、平和学という科目を開講する大学が増えているというが^{*32}、本学にはそれにあたるものがないので、敢えて講義で触れるように心がけてきた^{*33}。それらの講義の際にアンネ・フランクやアウシュヴィッツについてどのくらい知っているか尋ねると、ほとんどの学生はよく知らないと答える。名前すら聞いたことがないという学生もいる。『アンネの日記』を含め、それらに関する本を読んだことがあるという学生はほとんどいない。きいてみたことはないが、日本が太平洋戦争時に他国に対しどのようなふるまいを

*28 ヨーロッパ各地からユダヤ民などを乗せた貨車がビルケナウに着く。連行されてきた人たちが到着時に生死を選別された降車場（ランベ）が残る。ドイツ人医師が連行された人たちの顔色を見ただけで「働けるかどうか」を判断していた。働けそうだと判断された人は20～30%程度で、残りの人々は即刻ガス室に送られ殺害された。1日に殺された人数は多いときで7000人に上るといふ。

*29 映画『ショア』（Shoah）は、1985年のフランスの映画。クロード・ランズマン監督。上映時間は9時間30分。

*30 映画『ソビブル、1943年10月14日午後4時』（Sobibor, 14 octobre 1943, 16 heures）は2001年製作のフランス映画。クロード・ランズマン監督。上演時間は102分。

*31 無事に生還できた直前に少々センチメンタルな体験をした。ビルケナウでは歩き疲れ、それでも足を止めたら歩けなくなると自分を奮い立たせ、頑張って早足で歩いた。同行していた高校3年生の長男を思いのほか引き離してしまい、日本語のガイドブックを買うためにブックショップに寄った。店から出てくると、発車したシャトルバスの中から私の方を見て少し怒った様子でいる長男を見つけた。Wifiもそのときはうまくつながらなかったのと、その後に来たバスが故障するというトラブルが発生し、息子となかなか会うことができなかった。とても比較にはならないが、ランベに降り立った家族が引き裂かれ、泣き叫んでも引き離されていくという体験を疑似的に体験したようであった。彼らはどんなにつらく、悲しい思いをしたのだろうか。

*32 成蹊大学の「平和研究」、恵泉女学園大学の「核と軍縮」、立教大学の「平和と人権」、「世界政治と平和文化」、大阪大学の「平和の問題を考える」、新潟国際情報大学の「平和学」、帝塚山大学の「平和学」、茨城大学の「平和学」、琉球大学の「平和論」など（日本平和学会HPより）。

*33 以前は映画『アンネ・フランク』を見せていたが、180分という長い映画のため現在はスライドを使って話をするにとどめている。

したかも学生はほとんど知らないのではないかと思う。戦争について知らなければ今後同じようなことが起こるだろうというような短絡的なことを言うつもりはない*34。しかし、現在の日本が特定秘密保護法の制定など戦前と酷似してきていることを考えると、やはり「歴史から学ぶ」べきだろう。

では、どのようにして、歴史から学ばよいのだろうか。心理学の観点から平和を学ぶ際には、戦争に限定せず、人種間の紛争、偏見や差別、いじめといった幅広いレベルの「いさかい」を扱うことが多い。そうすると、古沢，入谷，伊藤，杉田(1997)が述べているように、社会心理学的には攻撃行動や愛他行動、偏見・差別・ステレオタイプ、内集団・外集団など、臨床心理学的には攻撃性の低減、PTSD、戦争生存者の「罪の意識」、グリーンワークなど、犯罪心理学的には暴力犯罪の規定因、教育心理学的には平和学習の方法、平和概念形成といったアプローチが可能であり、トピック自体は特殊なものではない（教育心理学を除く）。それぞれのトピックに「平和」という視点を取り込めばいいのではないかと思う。私はそれに加えて、心的外傷後成長(Post Traumatic Growth)についても平和と関連させて扱う余地があると考えている。また、「平和心理学」という領域もある。こちらは研究者の集まりとしてはまだ規模はそれほど大きくはないようであるが、学際的な学問分野であるという点で、今後大きなウェーブとなる可能性は大きいと感じる。

中谷(2005)によると、アウシュヴィッツを訪れる日本人は韓国人の4分の1に過ぎないという*35。また、以前は多く訪れていた日本の教員が最近ではほとんど来訪しなくなったという。どのような研究分野であっても、どのような学校段階であっても、教員は平和教育を担うことができる*36。アウシュヴィッツに限定するわけではないが、多くの教員にアウシュヴィッツなどの史跡を訪れてほしいと思うし、児童生徒にも平和の意味を伝えてもらいたいと思う。前述のように、アウシュヴィッツをはじめとする強制収容所からの生存者は多くはない。また、生存者の方々は高齢であり、今後話を聞く機会はどんどん減っていく。そうであれば、強制収容所のことや彼らの語りを意識的に後世に伝えるしか手はないのではないか。

「歴史から学んだと言えればよかった」のに、また戦争が始まってしまった...などということにならないように、私たちは歴史を学ぶべきだと思うし、その機会を学生にも大いに与えるべきだと思う。誰もがオスカー・シンドラーや杉原千畝になれるわけではないとしてもだ。ホロコースト生存者のペトラ・ミヒャルスキーさんは、ホロコーストを知った生徒から「もう1度逃げなければならぬときは、私の家で養ってあげたい」との申し出を受けたという（毎日新聞，2020年1月28日）。おそらく、ミヒャエルスキーさんは、生存者として語り部の役割を果たし、学校でも子どもたちに収容所での話をしているのだろう。この生徒のように考えることができる人を育てることができれば教員として本望だろうし、同時にそれを実現するのは非常に難しいことだとも思う。

*34 いや、やはりそれも真理であると思うのだが。アウシュヴィッツの4号館の入り口にはジョージ・サンタヤナの言葉「歴史を記憶しないものは、再び同じ味を味わわざるをえない」がある。

*35 韓国の人口は日本の約半分。

*36 広島市では幼稚園の4割程度で、何らかの平和教育が行われている（森川，不動，土屋，石井，2015）

引用文献

古沢総司, 入谷敏男, 伊藤武彦, 杉田明宏(1997) 語りつぎ未来を拓く平和心理学. 法政出版 (伊藤,1999 より間接引用)

伊藤武彦(1999) 平和心理学の現状と課題. 日本の科学者 34, 37-41.

毎日新聞 2020年1月28日8面(国際面)「アウシュビッツ解放75年」

森川敦子, 不動美咲, 土屋満並, 石井眞治(2015) 幼児期における平和教育の現状と課題
～広島市の幼稚園への質問紙調査をもとに～. 比治山大学紀要 22, 109-119.

中谷剛(2005) アウシュヴィッツ博物館案内. 凱風社

日本平和学会(2020) <https://www.psj.org/> 2020年2月4日